

## 疫病と人種差別：タスキーギ梅毒実験とアフリカ系アメリカ人

君塚淳一\*

(2022年8月31日受理)

### Plague and Racial Discrimination: Tuskegee Syphilis Experiment and African Americans

Junichi KIMIZUKA\*

(Accepted August 31, 2022)

#### はじめに

本論考は2021年12月18日に多民族研究学会(MESA)第36回全国大会のラウンドテーブルにて、世界的に猛威を振るい続けるコロナ禍の中、「疫病と多民族」という共通テーマで、他の研究者と共に発表したものを、論文として加筆してまとめたものである。歴史上、感染症と人種・民族を関連付けての差別や迫害、そして感染症を使用しての民族虐殺や浄化が繰り返されてきた。そんな中でアメリカでは、コロナ感染症を中国起源とするトランプ元大統領による差別発言が、中国系ひいてはアジア系へのヘイトクライムに発展するに至ったことはよく知られている。ラウンドテーブルでは、この状況から、改めて「疫病と多民族」の関係を掘り起こして論じてみることにした。発表は、長年、梅毒感染に関する人体実験がアフリカ系男性に行われていた「タスキーギ梅毒人体実験」として知られる事実を検証し、コロナワクチンとの関係、そしてこの実験がテレビ映画化された作品の内容を合わせて論じたものである。

1932年から1972年までアラバマ州タスキーギ(Tuskegee, Alabama)では、アメリカ公衆衛生局により、アフリカ系の男性を対象に梅毒の感染に関する臨床研究が行われていた。驚くのは人体実験と指摘されるその方法と公に実施され続けていた期間で、問題視されて以来、多くの論文や著書が執筆されてきた。その研究者が特に指摘する点とは、彼らを対象とした理由が奴隷制度まで遡る歴史であることと、この地タスキーギがブッカー・T・ワシントン(Booker T Washington, 1856-1915)が職業訓練学校を開校した地域である点だ(現在ではタスキーギ大学)。この事実を扱ったノンフィクションテレビ映画の『ミス・エヴァーズ・ボーイズ』(*Miss Ever's Boys*)が1989年にはまず演劇で公演され、その後1997年にはテレビ映画として制作され公開された。1997年、クリントン政権の際には生存者に対し謝罪も行われた。本論では、2019年から蔓延したコロナ禍の中、

---

\*茨城大学教育学部英語教育教室(〒310-8512 水戸市文京2-1-1; English Education, College of Education, Ibaraki University, Mito 310-8512 Japan).

地元周辺に残る，医療やワクチンへの不信感が根強い理由との関連を研究資料をもとにその経緯もさぐることにする。

特定の人種や民族に対する人体実験の事例と言えば，まず第二次世界大戦中におけるヒトラーによるユダヤ人へのホロコーストの際のナチの医師たちの実験が挙げられる。その最近の関連書には *Doctors from Hell: the Horrific Account of Nazi Experiments on Humans* (2005) があるが，様々な人体実験の様子が写真などと共に更なる新資料や生存者の証言が記載されている。周知のように，この時期には，ナチスにより骨・筋肉・神経の再生や骨の移植，マスタードガスやスルファニルアミド，マラリア感染，低温実験などの人体実験が収容所で行われていた。この書に序文を載せたホロコースト生存者のユダヤ系アメリカ人エリー・ヴィーゼル (Elle Wiesel, 1928-2016) は，ナチの医師たちを以下のように批判するが，これは医療分野における学問的追求が人道的倫理観を超え，人種差別から人間の命を軽視するあまり抽象概念を優先した結果だと説いている。

Who and what is to blame for the creation of the assassins in white coats?... Perhaps higher education placed too much emphasis on abstract ideas and too much on humanity. I no longer remember which psychiatrist wrote a dissertation demonstrating that the assassins hadn't lost their moral bearings: they knew how to discern Good and Evil; it was the sense of reality that was missing. In their eyes, the victims did not belong to humankind; they were abstractions. The Nazi doctors were able to manipulate their bodies, play with their brains, mutilate their future without remorse; they tortured them in a thousand ways before putting an end to their lives. (Spitz xxi)

「このタスキーギ梅毒人体実験もナチスのこの人体実験と共に，医療の名のもとに国家権力で民族を迫害する残虐行為」として扱われているべきだと述べるのは *Tuskegee's Truth: Rethinking the Tuskegee Syphilis Study* (2000) (以下 *Tuskegee's Truth*) の編者 Susan M. Reverby である (*Tuskegee's Truth* 3)。

またアフリカ系アメリカ人への人体実験という点では，現代産婦人科学の父とも称されるジェームズ・マリオン・シムズ (James Marion Sims, 1813-1883) の件がある。セントラルパークに建てられていた彼の銅像が 2018 年 4 月に撤去されたのだ。その理由は，彼の輝かしい功績も，奴隷制時代の黒人奴隷女性を実験台に使い得たものとされるからだ。さて，このような状況の中，地元でのコロナワクチン接種拒否と医療への不信感が残る背景となるタスキーギ梅毒実験とは何かを考察する。

## 1. タスキーギにおける人体実験とその背景

「タスキーギ梅毒実験 (Tuskegee Syphilis Experiment)」として知られるこの人体実験は，既述したようにアラバマ州タスキーギの地で，地元のアフリカ系アメリカ人に対して 1932 年から 1972 年の 40 年間に渡り行われていた。 *The Infamous Syphilis Study and Its Legacy: Examining Tuskegee* (2009) によれば (以下 *Examining Tuskegee*)，アメリカ公衆衛生局 (The United States Public Health Service) により行われたこの実験は，アフリカ系男性の梅毒症状を治療せず，その進行を観察するものであった。そのため対象の男性たちに治療として与えられていた処方薬は，実態は特効薬と

して存在していたペニシリンではなく、なんの効果もないアスピリンや滋養強壮剤といったものであった。彼らは「検査」に参加する代償として、無償で治療が受けられ、また墓も建てられるという特典が与えられるために協力したのだった (*Examining Tuskegee* 1)。

この人体実験に関しては明らかにされた事実と、その事実に関して残る疑問がある。まず、残酷な事実としては、アラバマ州メイコンのタスキージ周辺で、アメリカ公衆衛生局の白人医師たちが確認したところ、およそ400人のアフリカ系の男性が末期の梅毒にあったと考えられている。そしてその患者に与えられたのは既述したように、アスピリンと滋養強壮剤のみで、感染していない200人も検診の対象者にあつた (*Examining Tuskegee* 1-2)。また医師や看護師は郡の衛生局、また地元では由緒あるアフリカ系黒人教育施設タスキージ学校と関係し、地元病院も援助しX線、検査、検死もされていた。そして男性たちが、アメリカ公衆衛生局によってバクテリアの培養が難しい梅毒が接種されていたという証拠はないが、そう信じてる人がいることは事実で、それが地域に繰り返し世代を超えて消えないでいると指摘されている (*Examining Tuskegee* 2)。事実、これこそがコロナワクチン接種に対して不信感があり、CNNで報道されているように接種が進まない理由に他ならない。

さてこの当時の人体実験に関しては、医師たちは、アフリカ系に対し梅毒を“Bad Blood”というキーワードを用いて呼び、梅毒を病んでいる男たちが、投薬されないとどうなるかその経過を、実験したのであった。言うまでもなく、Obiora N. AnekweとEjinkonye C. Anekweが共著*Chronicling the Tuskegee Syphilis Study* (2013)において以下のように指摘しているように、この研究は人種差別を背景に行われており、その人種が違うという認識と、黒人は実験台にしてよいという白人優越主義から成立しているに他ならない。

Was the Tuskegee Syphilis Study worse than a series of medical errors? In most respects, it was. One factor was scientific racism. The study was performed against a backdrop of intense racism. During the beginning of the study, many scientists thought African-Americans and other minorities were physically different from Caucasians. The belief did not stop at skin color. For instance, there was an assumption that African-Americans were impervious to pain, as well as illnesses. In addition, the scientists and doctors involved in the Tuskegee Syphilis Study believed that bodies of African-Americans handled syphilis better than Caucasians. (Anekwe 27)

そもそも、この実験には、基礎となる研究が存在している。それは、オスロの梅毒研究で、梅毒研究者が良いスタンダードとなると考えた研究である。19世紀末から20世紀初頭に、ノルウェーのオスロの大学病院の梅毒クリニックの主任が約2000人の患者（初期と第二段階）に治療せずに行った実験である。薬ではなく人間自体が持つ自己免疫力で梅毒を克服できるかを実験した。50年後にその経過も観察されデータはテキストとして参考にされたのであった。そしてその後、アフリカ系への人種差別が、感染症に関して1910年に起きる。ミシシッピの医師が「特にmulattoes, octoroons, quadroonsからの梅毒と淋病が危険だとし、白人と黒人の異人種混合に警告を發し、その不道徳さと共に黒人自体に病原菌があり、この国がフランケンシュタインでアフリカ化されていく」という説が広まったのである (*Examining Tuskegee* 26)。この説が元で、白人と黒人の違いを

実験することに、アメリカ公衆衛生局は関心を持つことになる原因となる。衛生局のRaymond A. Vonderlehrが1938年に「我々が入手した情報では、病床に関して黒人と白人には明らかに生物学的な違いが見られる」とし、それが「黒人の血といまだ不明な梅毒の危険性が、黒人という人種への脅威を引き起こし、医学雑誌で広く読まれて評判になった」のであった。

Racism, medical arrogance, and state power may help us to see how the study started, but it not enough to explain how it continued... An analysis of class and gender within the black community is essential to see why Tuskegee Institute officials agreed to the study and how they related to the men brought in as "subjects." The history of the politics of both accommodation and resistance at Tuskegee Institute is required to explain the relationships among the federal officials, local state public-health doctors, and Tuskegee's staff. (*Tuskegee's Truth* 4)

Reveryが上記の引用で指摘するように人種差別と医療と政府の力が相まって、この実験が始まったことは、明らかであるが、さらに、なぜこのように長期間に渡り継続されたのか。そしてこの治療されなれないアフリカ系男性への人体実験は、いかに始まったのか。それは次章で確認したい。

アメリカ政府はこの実験は研究プロジェクトであるため、通常の医師－患者の関係は存在していなかったと主張し責任を回避した (*Examining Tuskegee* 107)。それは1997年5月クリントン大統領による謝罪があったが、その内容は人種的に不正な行為が起きたことを認めるもので、医療倫理や政治力の乱用については認めていないことでも明らかだ。だが謝罪へと前進した理由にはロビー活動に加えて、この放送されたテレビ映画が国民の関心を惹きつけたからである (*Examining Tuskegee* 224-225)。そのテレビ映画の内容については第三章でストーリーを中心に確認したい。

## Ⅱ. アラバマ州タスキーギという土地とBooker T. Washingtonそして人体実験

この舞台となるアラバマ州タスキーギという土地は、そもそもアフリカ系アメリカ人にとっては歴史的に重要な地域である。それは既述したとおり、アフリカ系の元奴隷であったブッカー・T・ワシントン (Booker T. Washington, 1856-1915) が、初代校長となり、1881年7月4日に小さな小屋からワシントンがスタートさせた職業訓練学校があった。その後、彼は北部の白人との関係づくりに奔走し、また地元の白人からの差別や迫害も何とか苦勞しつつかわし、分校も拡大しながら現在は大学として発展している土地。また彼の著書である『奴隷より身を起こして』 (*Up from Slavery*, 1890) は世界中で読まれ、彼は教育者であると同時に、学校の運営資金調達のため、卒業生の就職のために、北部の白人実業家とも関係を持つという実業家でもある人物だった。タスキーギはそんな彼が開拓した土地で、いわば、ワシントンが作り上げた奴隷解放後の南部黒人教育の中心地だ。学校をスタートさせたワシントンが奴隷解放後のアフリカ系に対して教育の中心にしたのは、大工や左官など手に技術をつけさせること。それだけでなく彼は、衛生面での徹底も指導し、歯も磨き体を洗うことも教えなければいけなかったという (Norrell 61-91)。その点でこの土地とアメリカ公衆衛生局の関係が出来たのは、ワシントンのタスキーギ学校との関係も原因のひとつであることは理解できる。National Negro Health Weekが1915年にタスキーギ校で健康推進キャン

ペーンとしてワシントンにより開始されたからである。公衆衛生を啓蒙しそれが白人黒人の関係改善にも貢献するとし、アメリカ公衆衛生局もそこに加わるようになった。その後、アフリカ系の健康状況の悪化と死亡率の高さが発表されると、益々、この運動の重要性が叫ばれた。この開始の背景やその後の展開については、Susan L. Smithの*Sick and Tired of Being Sick and Tired: Black Women's Health Activism in America, 1890-1950* (1995) に詳しい。ワシントンはその目的を以下のように述べて、the National Negro Business Leagueの代表として、健康と黒人の統一両方のために、また人種の向上と経済的発展のために、よきこととしてサインしている。(Smith 36-37)

Without health...it will be impossible for us to have permanent success in business, in property getting, [and] in acquiring education... Without health and long life all else fails.

Continuing, Washington avowed:

We must reduce our high death-rate, dethrone and enthrone health and long life. We may differ on other subjects, but there is no room for difference here. Let us make a strong, long united pull together. (Smith 38)

ワシントンは、黒人医師や看護師を含む、アメリカ全土の黒人に対してこのキャンペーンを広く呼び掛けたものの、その反面、アフリカ系の間の政治的な意見不一致も、特に南部においてはあるだろうと懸念していた。だが、タスキーギのワシントンの元には賛同の手紙が多く舞い込み、受け入れられたのであった。そして、最終的に人種差別は、アフリカ系の健康管理と健康の向上、そして伝染疾病が微生物によるものであることを広く認識させ、アフリカ系が自宅を含めクリーンになることが白人を安心させ、差別撤廃や黒人の権利を獲得することに繋がるワシントンは考えるようになる。この点については、白人の家で料理から掃除まで白人の世話をして働く機会があるアフリカ系女性に対しては、その貢献度は大きかったとSmithは指摘している (Smith 39-42)。その後、National Negro Health Weekが提案されるが、ワシントンは1915年11月に他界し、その活動が一度は滞っていたが、彼の遺志が引き継がれて翌年から開始される。時期は4月の第1週目に設定され、活動の内容は健康状態の改善を基盤にした、黒人の健康教育、ひいてはアフリカ系の地位向上にも繋げることにあった。

キャンペーンに関しては多くの配布物なども作り啓蒙活動を行うと同時に、多くのアフリカ系関連活動を協力させ、身体検査などのデータを報告書として提出し、タスキーギ学校やコミュニティーには、アメリカ公衆衛生局が全面的に介入して協力することになった。既述したようにこのキャンペーンの展開については残念ながらワシントンは既にこの世を去っていたため、見ることはできなかった。結局、ワシントンのこの功績を引き継いだのは、ワシントンと共にこの活動に関わっていたロバート・モートン (Robert Morton, 1867-1940) である。

この「タスキーギ梅毒実験」が始まる過程で、タスキーギ学校の代表を務めていたのはまさにこのモートンで、実験に関してもヘルスワーカーと学校が密接に関係していた。具体的には、このタスキーギ学校校長ロバート・モートン、タスキーギ病院の医長ユージン・ディビル医師の二人が実験をすることを政府に承認した。だが特にこの実験に積極的であったのは、アメリカ公衆衛生局の

黒人看護師のユニス・エヴァース（Eunice Rivers, 1899-1986）であり、1932年、彼女が、タスキーギ学校の指導者と共に、公衆衛生局による実験に携わることになる。彼女は医師と共に患者に会い、梅毒には効果のないアスピリンや強壮剤などを、病気に効く薬だと手渡していたのであった（*Examining Tuskegee* 55）。研究で行われたこの人体実験であったが、資金援助をしてきていたローゼンワルド基金が打ち切られることになる（*Examining Tuskegee* 57）。予定では実験は半年の間に検査を行い、その後は、通常の治療をすることになっていたというが、しかしながらそのまま治療は行われず、実験だけが継続されることになったのである。

Smithはタスキーギ移動学校を通じて黒人を健康にすること、またエヴァースはアメリカ公衆衛生局の仕事をする事で1930年代の恐慌の時代に職を得ていたいと思いついたのだと指摘している（Smith 108）。だが実験は予算獲得のため、当初は6か月間とされていたが、その後も、医師の強い指導の下、40年間も続くことになる。特に1942年にはペニシリンが一般に普及するようになっても、実験対象の人物はリストアップされ、投与が拒絶されていたことには驚かされる。

### Ⅲ. ドキュメンタリーテレビ映画『ミス・エヴァース・ボーイズ』(*Miss Evers' Boys*, 1992)

ドキュメンタリーテレビ映画『ミス・エヴァース・ボーイズ』はこの「タスキーギ梅毒実験」として知られる1932年から72年まで行われた梅毒に関する人体実験の事実に基づいて撮られた作品である。主人公はこの実験に当初から最後まで関わっていたアフリカ系看護師エヴァースで、事実を知らながら隠蔽していた罪を問われ、尋問されながら、過去40年間を回想する形で作品は進められる。

作品はまず1992年演劇として劇作家David Feldshuh（1944-）により大都市で次々と公演を重ね、その後改めて1997年にHBOテレビ映画としてジョセフ・サージェント（Joseph Sargent 1925-2014）監督が制作し、多くのエミー賞にノミネートされ、最終的には4部門で受賞したものである。映像作品ではまず、以下の解説が映し出される。

In 1932, many people believe that the high mortality rate and incidence of disease among African-Americans was proof that they were “biologically inferior” to whites.

Many also believed that black doctors and nurses were less capable than their white counterparts. The government, concerned that disease among rural black communities would spread to the White population, decided to implement several special programs “for the Negro.” The most ambitious of these programs took place in Macon County, Alabama.

It came to be known as “The Tuskegee Study.” (*Miss Evers' Boys* introduction)

万人が観ることのできるテレビ映画ゆえに表現に考慮しているようだが、内容は予算が打ち切られたのち、この人体実験は継続して行うことになり、梅毒に肉体が犯されて苦しんで死にゆく男たちを、看護師エヴァースが、良心の呵責に苦しみながらも、最後まで責任を果たす姿が描かれるものである。

主人公のエヴァースをAlfre Woodardが、彼女の幼馴染のカレブ・ハンフリーズをLaurence

Fishburneが、隠し続けることを指示した医師サム・ブロードスをJoe Mortonが、またエヴァースの父親を名優Ossie Davisが演じている。タイトルの『ミス・エヴァース・ボーイズ』とは、舞台上で歌って演奏して踊ることを楽しんでいる地元の陽気な男たちが、自分たちにはアイドル的な存在であったエヴァースの名を取ってグループ名にしたことからつけた皮肉な命名であり作品タイトルにされている。作品後半部では、メンバーの一人ウイリー・ジョーンズ (Willie Johnson) が得意のダンスが、梅毒の症状で、体が動かなくなり上手く踊れなくなる展開は印象に残る。

さて映像では大半が時間の流れを追いつながら分かりやすく進められていくが、冒頭はエヴァースに対する1972年の合衆国上院委員会による尋問に対する証言から始まる。彼女はどれほど看護師として身も心も捧げて働いてきたかを訴える。そして徐々に尋問は核心に迫っていき回想という形で映像により流されていく。だが最初のシーンは、彼女が付いていたアフリカ系医師ブロードスが、ラバに胸を蹴られて重傷の少年を救う場面で、どれだけ彼らがコミュニティーのために貢献してきたかを描き出すもので、同時にこの実験の責任が衛生局ひいては国家に求めていると受け取れる。

その後、白人の医師ダグラスがタスキギーの街を訪れ、この梅毒人体実験のことが二人に知らされ、流行している梅毒を食い止めるためプログラムが組まれ、アフリカ系だけを対象にされ、このタスキギーが選ばれたのは、南部でわずかしかないアフリカ系専用の病院がここにあり、また梅毒が集中しているからと、ダグラスから説明を受ける。だがアフリカ系医師はこの地域に梅毒が多いのは白人病院が梅毒患者自体の受け入れを拒絶するからで、黒人の感染症は梅毒よりもペラグラや肺炎、結核の方が多く、「梅毒がアフリカ系特有の病気という統計」はないですよ、18世紀にはフランスやロシアやポーランドで流行ってたと反論する。これも観る側に、白人の偏見が実験を正当化し、始められたことを示すものである。検査にあたり「梅毒」(Syphilis)という言葉を使うと彼らを怖がらせるし、意味も分からないだろうから、彼らが何でも「悪」の意味で使う“Bad Blood”と呼んだらどうかとエヴァースが提案する。彼女も国の仕事を請け負い、黒人コミュニティーに貢献すると思いだめた仕事だからだ。

映像の前半、そんな彼女が誇りをもって地域の黒人コミュニティーを回り、参加者を集め、多くの黒人男性が病院に治療を受けに集まることになるよう描かれる。白人医師ダグラスが“Bad Blood (梅毒)”の説明をするが、医療用語だらけで男たちには理解できない。だがそのあとにエヴァースが、わりやすい説明で解説し、男たちが理解できるシーンは、当時、彼女がコミュニティーを第一に考え仕事をしていたことを示そうと描いている点だ。

エヴァースは作品半ばでは、幼馴染のカレブ・ハンフリーズに問い詰められ、彼にも、ミス・エヴァース・ボーイズのメンバーを含む多くの黒人たちにも、“Bad Blood”が感染していることを彼に漏らしてしまうが、治療すれば治癒すると説明する。また彼の方も感染の情報は秘密を守り誰にも話さないと約束する。だが感染しながら治療せずに放置すれば感染者が増加するのは当然のことだ。その後、アフリカ系医師ブロードスは白人医師ダグラスからプログラムは政府に予算がなく中止になったことを聞かされる。ダグラスは政府と交渉すると答えるが、多くの患者に治療ができずに時間だけが過ぎていく映像が流れる。病院の予算も削減さ、彼女は白人家庭の奉公人としても働く。

問題はその後で、二人の医師は政府に呼び出されて、本論で既述したオスロの白人の梅毒についての実験レポートがあるから、黒人のレポートが欲しい、ぜひオスロと同じ状況でタスキギーの患者に治癒薬を与えず黒人の人体実験のレポートを行うように依頼される。半年から1年続けること

でその貢献の成果でまた予算がもらえるというダグラスの言葉を信じてプロダスとエヴァースは依頼を受け入れる。だがいつになっても予算はつかず、時だけが過ぎて行くと彼女は説明する。このオスロの実験は白人に対して行われたものだが、治療薬や方法もないころの大昔のことで、ペニシリンも手に入る時期に、それも使わず実験を行うことが人道的に許されるべきでないことは明らかだ。

尋問では1942年には特効薬のペニシリンが一般に市販され手に入ったはずと指摘されるが、映像では、プロダスやダグラスはペニシリンは他の治療に使用し、実験対象者には危険な副反応があるから使わないとエヴァースに反して説明する場面もある。だがエヴァースと幼馴染のカレブ・ハンフリーズは兵役を機に、ペニシリン治療を受け、この人体実験のことを知り、エヴァースに抗議し、彼女は医師二人にペニシリンで処置するように提案するが彼らは未だ効果に個人差があることと実験を継続することを望み受け入れない。医学の発展にはやらなければならないこともあるという理由からだ。カレブは病状が進んで上手く踊れなくなったウイリー・ジョーンズを他の病院でペニシリンを打ってもらうように連れて行くが、他の病院には実験中であることがわかるリストが配られており、診察を受け付けてもらえない手はずになっている。このように、このテレビ映画は70年間にも渡り隠蔽がされながら、人体実験は継続されてきたことを映像化して伝える作品として仕上げられている。

作品の最期は観るものに、この人体実験が、人種差別が原因で引き起こされ、また40年間もの間、継続されたことを明らかにしてまとめられる。それは議員による最後の質問に答える形で彼女の口から伝えられる。議員からは「あなたの看護師として患者に身も心も捧げたことには敬意を称し理解もできるが、治療ができるのに彼らがそうされずにそのまま放置されたのには理解できない」という発言がされ、彼女は堂々と「それでも良かったと思います」と答える。「何が良い」のか意味が分からない彼に対して彼女は続けて「われわれは白人と黒人の間に梅毒に対する反応において違いはないことが証明できたんですからね（白人も黒人も同じ人間である）」と。議員は「もしも彼らが白人だったら、彼らはこんな扱いは受けなかったか？」と尋ね、彼女は「誰よりもあなたにご存知だと思いますが、答えはイエスです。そもそも彼らが白人なら、アメリカ公衆衛生局がこんな実験をやること自体に同意しないでしょう」と答える。まさにこの作品の意図するところを最後に、明確に大衆誰にもわかるように示してまとめているのだ。

#### IV. おわりに

Harriet A. Washington は *Medical Apartheid: The Dark History of Medical Experimentation on Black Americans from Colonial Times to Present* (2006) において、「アメリカ南部は特に不衛生な場所だった」と指摘している。そして「もちろんこの場所は、アフリカから連れてこられたアフリカ人が奴隷にされていた地域だ。…そんな南部はアメリカの医療で言えばどん底の地域で、死が三倍になる合流地帯であった。つまり北アメリカ、ヨーロッパ、アフリカそれぞれの病原体が集まる場所だからだ。それも珍しい感染症が発症するもので、例えば、鉤虫感染症、マラリア、黄熱などなど」と解説する (Washington 27)。アメリカ南部は奴隷制時代から感染症に苦しめられ、その元凶が奴隷貿易であることは皮肉であると同時に、さらにアフリカ系がこのような形でその犠牲になっていたことは

許しがたいことである。

アメリカ政府そして保健機関に対しての不信感からコロナ感染が蔓延し、ワクチン開発が進む中で、タスキージ近郊のアフリカ系コミュニティでは、ワクチン接種が進まない報道がされた。もちろん原因はかつての人体実験が影響していることにほかならない。CNNのインターネットサイトにも“A Black Man Feared the Vaccine Because of the Tuskegee Experiment. After Covid-19 Devastated his Family, He Changed His Mind.” (CNN August 2, 2021) という関連記事が掲載されている。これは改めてタスキージの人体実験を思い出させるものだが、同時に様々な形で感染への恐怖と異質排除から起こる差別、そしてそれに伴う民族の浄化や虐殺が歴史の中でこれまで繰り返されてきた。それはペスト、梅毒、エイズ、コロナなどの歴史を見ると、今後もいくらかでも起きうる可能性があることを認識し警戒しなければならない。

### 引用文献

- Anekwe, Obiora N., Ed.D, *Ancestral Voices Rising up: A College Series on the Tuskegee Syphilis Study*, North Charleston: CreateSpace Independent Publishing Platform, 2014.
- Anekwe, Obiora N., Ed.D and Anekwe, Ejinkonye C., Ph.D, *Chronicling the Tuskegee Syphilis Study: Essays, Research Writings, Commentaries, and Other Documented Works*, New York: Anekwe & Anekwe, 2013.
- Anekwe, Obiora N., *A Collage Series on the Tuskegee Syphilis Study*, North Charleston: CreateSpace Independent Publishing Platform, 2014.
- Reverby, Susan M. ed., *Tuskegee's Truths: Rethinking the Tuskegee Syphilis Study*, Chapel Hill: U of North Carolina Press, 2000.
- Smith, Susan L., *Sick and Tired of Being Sick and Tired: Black Women's Health Activism in America, 1890-1950*. U of Pennsylvania Press, 1995.
- Norrell, Robert J. *Up from History: The Life of Booker T. Washington*. The Belknap Press of Harvard Univ. 2009.
- Spitz, Vivien, *Doctors from Hell: the Horrific Account of Nazi Experiments on Humans*, New York: Sentient Publications. LLC, 2005.
- Washington, Harriet A., *Medical Apartheid: The Dark History of Medical Experimentation on Black Americans from Colonial Times to the Present*. New York: Anchor Book, 2008.
- A Black Man Feared the Vaccine Because of the Tuskegee Experiment. After Covid-19 Devastated his Family, He Changed His Mind.* (CNN August 2, 2021)
- 君塚淳一 「ガーヴェイとワシントンにとっての大衆・教育・自立」『茨城大学教育学部紀要（人文・社会科学・芸術）』63号, 2013.
- DVD: *Miss Evers' Boys: A Government Lie, A Woman's Secret. A Story That Must Be Told*. HBO NYC, 1997.

